

(2) 三瓶小豆原理没林の年輪年代法による検討 (2)

光谷拓実 (奈良文化財研究所)

平成11年度におこなったスギの埋没樹幹の年輪年代法による調査結果では、試料総数4点のなかの3点は、一度の火砕流で同時に枯死したものであることが判明したが、残る1点はこの火砕流より2年も前のものであった(図4.3.3-1参照)。

この年代差は、他の何らかの原因で枯死していたものが、2年後の火砕流に巻きこまれ、同一火砕流の堆積土層中に閉じ込められたものなのか、判別しがたい。このことを解明するためにも、追加の試料が必要であった。

今回、新たに3点の埋没樹幹の追加調査を行なうことができた。以下に前回の調査結果を踏まえ、その概略を報告する。

1. 試料と方法

現地から搬送されてきた円盤型標本は3点であった。直径はそれぞれNo.1—166cm、No.2—72cm、No.3—57cmで、いずれも樹皮直下の最外年輪まで残っていた。

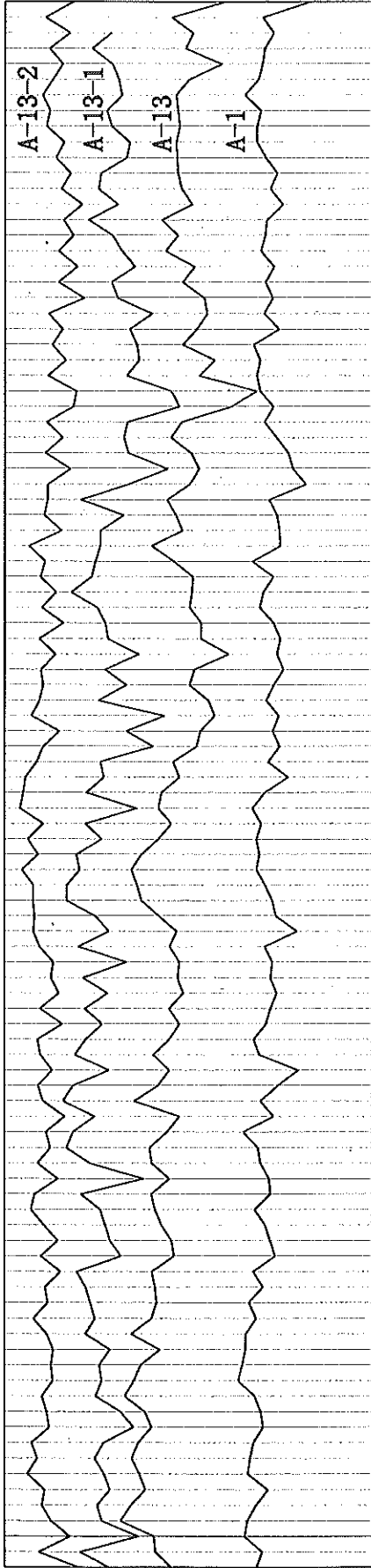
なお、No.1は埋没木中最大の直立したスギA-12であり、先端部の直径は178cmである。この先端部の標高は、215mであり、水田として利用されていた土壌表面から約5.8mの地下に埋もれていたものである。No.2は、A-5の根元に横たわっていた土石流によって押し流されたと思われる流木で、標高約208m地点から掘り出したものである。No.3は、B地区の2次調査で確認していたスギの流木B-4で、埋没標高は218.5mである。この埋没の高さは、地表面下2.3mに当り、一連の埋没していた流木中最も上部に当たるものである。

年輪幅の計測や、年輪データの処理法は前回調査と同じである。

2. 結果

試料3点の計測年輪数はNo.1—490層、No.2—221層、No.3—114層であった。3点相互の年輪パターンの照合は成立し、いずれも最外年輪の位置で合致することが判明した(図4.3.3-2参照)。この結果は、前回の1点を除く他の3点の結果と同じであることが判明した。

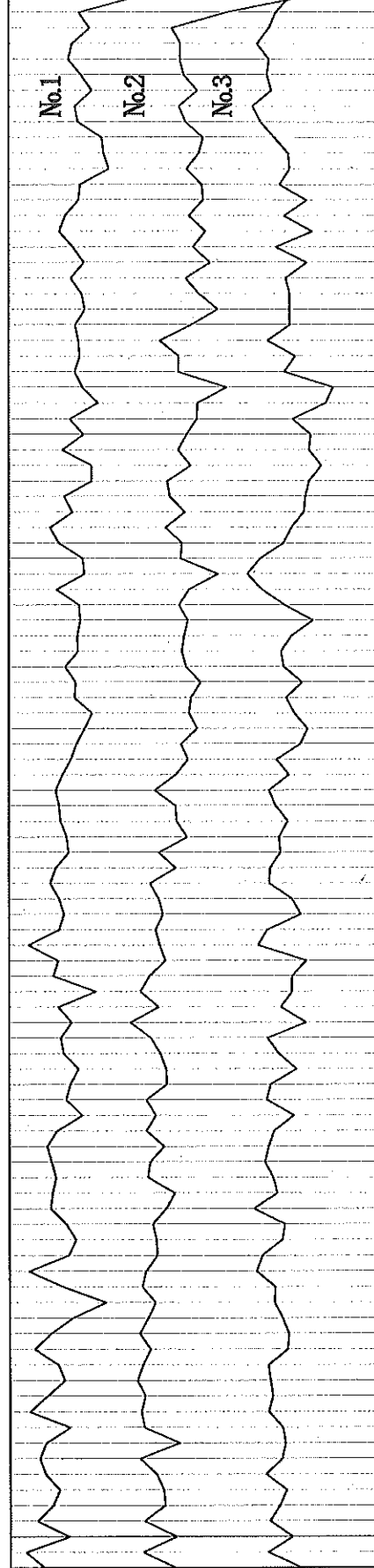
また、直径166cmの中心までの樹齢は636層分まで確認することができた。この個体の根元付近の樹齢は650年以上はあるものと推定される。



100

図4.3.2-1 平成10～11年度にかけて採取された試料4点の年輪パターングラフ

1



100

図4.3.2-2 平成13年度に採取された試料3点の年輪パターングラフ

1